

「俳句に詠まれた仏」

百目鬼 強

一、はじめに

まず、この「俳句の詠まれた仏」の文章を始めるに当たっては、高浜虚子が詠んだ「仏」の句を挙げてみたい。そこには、俳句の描く「仏」の本質が見え隠れしているからである。

新涼や仏にともし奉る  
風が吹く仏来給うけはひあり

これらの句は、秋を中心に詠まれている。「新涼の句」も、「風が吹く」の句も、「魂迎」の行事の頃に詠まれた句だと思われる。面白いのは、同じ五百番の中にみられる中に、

新涼の驚き貌に來たりけり

という句もあって、「風が吹く」の句と取り合わせて鑑賞すれば、虚子の言わんとする「仏」について思い当たるものが出てくる筈である。「仏」の友人と同様に、ある一定の季節に訪れる「客」としての見たてである。そのお客様が、先祖が仏に姿を変えてやって來たり、あるいは、友達であるかの違いである。虚子は、「仏」は、あくまでの季節の移ろいを表出する対象としての詠み方をしていくが、仏・仏像の内面に迫るといった様なことはしていないのである。俳句の世界では、四季の移ろいの中にみられる仏教的な無常観、あるいは、虚子の様に仏教行事を季節の行事として合、あるいは、虚子の様に仏教行事を季節の行事として句の中に詠み込んでいる場合がある。この評論では、今までに俳句として詠まれた「仏」(仏教行事・風物を含む)について、俯瞰すること、俳句を通して考えてみたい。

二、近世俳諧の中の仏

近世俳諧の中で、仏はどの様に詠まれていたのだろうか。近世俳諧の「仏」は、私達よりも一層、日常生活に密接な江戸時代に「仏」は、当時の人達には、一層、身近であった。戸時代に「仏」は、当時に果たしてどうだろうか。芭蕉の『奥の細道』の中で、奥州平泉を訪れた時に詠んだ句がある。

五月雨の降のこしてや光堂

前文には、

兼て耳驚したる二堂開帳す。経堂は、三将の像をのこし、光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝散うせて、珠の扉風にやぶれ、金の柱、霜雪に朽て、既頽廢空虚の叢と成べきを、四面新に困て、薨を覆て風雨を凌ぐ。暫時千歳の記念とはなれり。

この紀行文の一節では、奥州三代の棺が安置された光堂について述べられている。句の「奥の細道」の文章は、ただ単に紀行文、あるいは前文と云うよりも、その句を詠むに至った心象を表出している点で、非常に興味深い。前文に描かれていて、秀衡の遺跡への思いは、季節の無常と共に、その心情を通して「五月雨」という季節語に集約される仕掛けとなっており、それが、同時に光堂の明るさや結びつくことによつて、明暗の妙を表現し得ている。奥州三代の長、藤原秀衡は、宇治の平等院に倣つて、様々な浄土建築を残したが、浄土教というのは、蓮の花に莊嚴される阿弥陀仏の「光」を重んじている。芭蕉の句は、直接には「仏」を詠んではいないが、その情景を紀行文、句に詠み込むことで、「仏」の本質を描き得ているのである。紀行文の場合には、この様に前文が附されていることで、一層の深い仏教的な心情を汲み取ることが出来るが、一般の俳諧連歌の中では、もっと表層的な「仏」の見方に、なりがちである。「仏」の語で検索してみると、次の様な俳諧七部集を「仏」の語で検索してみると、次の様な

句がみつかった。

稲妻に大仏おがむ野中哉	荷兮	去来	芭蕉	加賀小春	端午	京とめ
涼しくも野山にみつる念仏哉						
鳥辺野ゝかたや念仏の冬の月						
灌仏の日に生れ逢ふ鹿の子哉						
けふの日やついでに洗ふ仏達						
仏より神ぞたうとき今朝の春						

「仏より神ぞたうとき」の句は、結局は、春という「めでたさ」を讃える様な時には、仏よりも神の方が尊いということで、あくまでも、「仏」は、時候・季節に結びつけて詠まれていく。『けふの日や』の句も時候としての読み方。

また、念仏の句も多い。芭蕉の「灌仏の日」の句は、灌仏会の時候に詠まれた句であるが、その折りにちよど奈良にいたので、「生れ逢ふ鹿の子哉」と続けており、単なる時候の句に芭蕉らしい命への愛情が詠み込まれている。また、釈迦の前世を描いた経典である『過去現在因果経』にみられる物語にも、鹿が登場する説話が見られ、芭蕉は、経典、仏典を踏まえているのである。

江戸時代は、浄土集、浄土真宗と念仏が盛んな時代であり、日常行事として一般化していた。この為、念仏の句も多い。去来として「野山にみつる念仏哉」もその様な念仏行事の一向を詠んだ句であり、野趣に富んでいる。

がむ野中哉「は、写生の句であり、現代にも通じる「仏」の見方が感じられる。

芭蕉の『奥の細道』の紀行文等には、深い内面が描かれて、月次の句の中における「仏」の位置にとどまってい

三、正岡子規と「仏」

明治期に入れば、当然、正岡子規ということになるが、『子規句集』を紐解くと、数多くの作品群の中で、「仏」を詠んだ作品は、極僅かと言っても、差し支えないだろう。

大仏に草餅あげて戻りけり  
煤払や神も仏も草の上  
千年の煤もはらず仏だち  
糸瓜咲て痰のつまりし仏かな

他にも初期の作品に「仏」を詠んだ句もあるが、代表的な作品を挙げるとこの程度だろう。「大仏に草餅あげて」の句は、面白い。奈良で詠んだ句らしい青臭さ、野趣が草餅に表れている。先ほど俳諧七部集にみられる「稲妻に大仏おがむ野中哉」と同じ様な面白さがあるが、芭蕉の時代は、大仏殿が焼失されて大仏が野晒しの状態であったと言われている。この為、「野中」という言葉がみられる。「草餅」というのは、實際の鄙びた様子を表しているのだと思う。「煤払」というのが、「神も仏も草の上」との言い方が面白い。若草山の麓の仏閣や春日大社のことを詠んでいるのだろうか。この句の直ぐ後に、千年の煤もはらずの句が来ており、年末の煤払いの時期に奈良で詠まれた句であろう。当時の奈良は、廃仏毀釈で、有名寺院も荒れていた。そう言った中に野趣、風情を感じさせる句を詠んでいる。そう言った意味では写生とも言えるが、やはり、写生よりも年中行事の描写に重きを置いている点は、蕉門俳諧と大きな違いはみられない。「糸瓜咲て」の句に出てくる「仏かな」の仏は、病床の自分自身の比喩として表したものであり、これも信仰の対象の「仏」ではないが、その自己比喩に「仏」を用いる辺り、さすがに子規らしい冴えが感じられる。ところどころで、正岡子規は、美術品としての「仏」についても興味を持っていた。「病床六尺」の中で、チベット曼茶羅の事に言及している。当時は、チベット仏教（経典）の事を喇嘛教（らまきょう）と呼んでいた。

喇嘛教の曼茶羅、これは三尺に五尺位な切れで壁



みほとけのじひのなかゆびねむのはな 鈴木砂紅  
秋風をきくみほとけのくすりゆび 沢木欣一

「みほとけの」の句は、「じひのなかゆび」とある様に、  
仏の様態の写生句であるが、「じひ」と「ねむのはな」が  
結びつくことで、優しい季節感が巧みに表現されている。  
「秋風をきくみほとけ」の句でも同様に指が、それが今  
度は、「くすりゆび」が詠まれているのが面白い。

幾鉦を受けて仏の笑み給ふや 松林尚志  
磨崖仏滴りに浮く眉目かな 柴田白葉女  
翔ぶものを赦す日永の野の仏 西田紫峰

「幾鉦を受けて」の句は、仏の製作課程に想いを馳せ  
ているユニークな視点による句であるが、「鉦」で彫られ  
る仏像が今まさに「仏」になるうとする瞬間を詠んでい  
る。  
「磨崖仏」の句では、恐らく雨の磨崖仏の情景を詠ん  
でいるが、雨の滴りを涙に見立てながらも、それを具体  
的に表さない点に表現の深さがある。全ての仏の本性は、  
情景の中に同化している。翔ぶものを「の」の句も同様に野  
仏の中には、「仏」の心があり、それが情景に溶け込んで  
いる。  
以上を総括すると、現代の俳句表現における「仏」の  
あり方は、明治期の俳句に比べて「仏」に一歩近づいて、  
その内面を汲み取りながらも、あくまでも花鳥諷詠の情  
景の一部として「仏」を俳句表現に取り込もうとしている  
点で、一層の表現の深みが会得される様になっている  
印象をこれらの作例から、受けるのである。

